

地球惑星科学委員会（第24期・第2回）

議事録

日時 平成29年12月25日（月）10:00-13:00

会場 日本学術会議6階6-C(1)(2)会議室

出席者（敬称略）：藤井、木村、田近、春山、川村、高橋、中村（尚）、石渡、伊藤（香）、伊藤（悟）、植松、江守、大久保（泰）、大路、沖野、小口、奥村、蒲生、川口、川幡、北里、久家、小嶋、近藤、齋藤、佐竹、佐藤、篠田、杉田、鈴木、関、高藪、張、佃、津田、中島、中田、永原、中村（正）、西、西田、西山、花輪、原田、氷見山、平田、福田、堀、益田、村山（泰）、村山（祐）、森田、安成、矢野、藪田、山形、山岸、山田（58名）

欠席者（敬称略）：相川、東、碓井、大久保（修）、大谷、沖、三枝、佐々木、寶、谷口、中村（卓）、新野、林、古屋、八木谷、山岡、山川、渡部、渡邊（19名）

議事録案

委員会の会議に先立ち、24期の地球人間圏委員会の役員が自己紹介し、当委員会に所属する委員が自己紹介を行った。

委員長は配信資料を基に地球惑星科学委員会の全体組織を用いて傘下にある分科会、小委員会について説明を行った。

1. 第24期第1回地球惑星科学委員会議事録案の確認について

24期初回の委員会の会議において、期首に設置すべき分科会の設置を承認したことを報告し、国際連携分科会の傘下に23期から24期への移行期に3分科会が小委員会に変更、2小委員会が合同委員会となったことについて理由を説明した。23期大久保前委員長からの申し送りを考慮して、24期も人材育成、学術力の強化にむけて活動を進展させることを示した。夢ロードマップの改定作業について議論し、JpGUとの共同作業で行うことを報告した。

2. 第23期地球惑星科学委員会の活動総括と24期への申し送り事項について

大型研究計画と夢ロードマップの改定についてはJpGUと地球惑星科学委員会とが両輪として活動し推進することとし、研究力の強化についてフォローアップを行うことを申し送り事項とすることを説明した。

意見；永原：大型研究をコミュニティーとして評価できるようにする。他分野との間での競争をしのげるようにするべき。

回答；藤井：関係学協会においても当委員会と共同で大型研究をポリッシュアッ

プさせる

意見；氷見山：他分野と比較し当委員会が申請する大型研究の話題の出し方について考えるべきである。1・2部の考えを理解し当委員会での対応策を考えるべき。

回答；藤井：当委員会では地球圏分科会で上記について審議を深めるとした。文科省フロンティア予算についての説明を行った。当委員会において将来計画を立てることが重要であるとした。次期の大改定をにらみ審議を進める。

3. 第24期学術会議と地球惑星科学委員会の組織と活動方針について

第1回地球惑星科学委員会及び企画委員会の議論により策定された活動方針（案）について、資料を基に説明が行われ、委員からの意見（連携の範囲を広げる）を反映して文言の修正を加えることとし、原案を承認した。具体的には、JpGUや学協会、全国学科長・学協会会議等と連携を強化して活動を進めること、夢ロードマップ改定すること、そのために、2018年5月の連合大会・JpGUユニオンセッションにおいて夢ロードマップについて議論を行うこと、2020大型研究計画マスタープランの策定支援を行うこと、地学系教員アンケートの結果を人材育成分科会で生かしていくこと、初等中等教育での人材育成にも注力すること、社会貢献分科会においては23期の審議をもとに提言案について審議を進めること、国際的にみて日本の学術力が低下していることを考慮し、学術会議の提言を基にJpGUと連携して地球惑星科学の将来予測を行い、問題点の解消方策を具現化すること、等である。

意見；平田：全国学科長会議・学協会長会議以外にこれにかかわる機関として国立研究開発法人、共同利用協同研究拠点などの活動を明示すべき。

木村：24期では高等教育、アーリーキャリアの重要性を鑑みた議論が必要とする。さらに、これを拡充し高等学校の地学教育についての将来を考えることにしたい。この中では教育人材の養成を議論する。高校理科を国民の求めるレベルで考えるようにするための理科教育の在り方を考えたい。23期では地学・地理用語小委員会を設置し現況を示し混乱している状況を示した。大学教育の変化を考え、日本の学術力の低下を抑えるために当委員会では地球惑星科学分野の特殊状況を考えて議論を進めたい。2ワーキンググループを設置する予定である。

4. 分科会および小委員会の活動について

資料を用いて当委員会に置かれている各分科会ならびに各小委員会の設置表（活動内容）、ならびに名簿、世話人を示した。各分科会の世話人から、資料に基づき24期の各分科会の目的と活動方針について説明が行われた。国際関係の分科会のもとに設

置されている小委員会の目的と活動方針についても説明がなされた。

中村：国際連携分科会の委員会活動と国際委員会について当委員会のもとに設置されている分科会ならびに小委員会の組織上のルールを説明した。また、日本学術会議から分担金を支出している分科会、小委員会について説明を行い、24期で改定の可能性があることを示唆した。国際連携分科会のもとに置かれている小委員会の組織について説明を行った。小委員会の設置についてルールを説明した。

小口：IGU 分科会とその傘下の小委員会の活動方針を示した。今後、委員追加をすることを説明した。

山形：初回の会議で4名の特任連携会員を申請。日本の海洋科学にかかわる提言を作成する予定。2019年富山に当分科会の国際会議を招致し張先生を中心として準備する。

中田：当分科会は100年以上の研究団体。IUGGの8委員会を当分科会の8小委員会に対応させている。

北里：IUGS分科会、国際地質学連合の日本での対応委員会。今後、委員追加を考える。IUGS参加のコミッションと対応した小委員会を設置。

中村尚：FE_WCRP 合同分科会への名称変更を説明し、この傘下にある小委員会を説明。なお、CLIC, CLIVAR, GEWEX, SPARC 小委員会はWCRPのコアプロジェクトに対応する。

安成：最近のFE関係の動きを説明した。社会との連携が重要課題であるためFEの推進と連携とし、連携を強調する名称に変更した。日本FEコンソーシアムと関係を持って活動を行っている。

コメント；氷見山：GLPの設置書内の字句修正依頼。

村山：情報学委員会のもとに設置されている国際サイエンスデータ分科会の傘下に置かれているWDS小委員会についての説明を行った。

最後に委員長から下記の連絡が伝達された。

藤井：各分科会ならびに小委員会の委員追加、削除は今後も可能であると説明した。

委員追加は幹事会での承認が必要であり、当委員会あて連絡を入れることとした。

2018年11月、22月の幹事会の日程を示し、この時期に合わせて委員追加が可能であるとされた。

5. 大型研究計画および2018年4月のユニオンセッションについて

田近：資料を基にして、夢ロードマップの改定についての説明を行った。大型研究計画は夢ロードマップに位置づける必要があることで、両者の連携を図りながら改定

を目指したい。ここでは JpGU、地球惑星科学に関する研究機関、学協会、学部長・専攻長会議などとも連携させて、採択を目指して活動を進める。また、他分野領域からの評価も考えて方針を固める。

資料を用いて、前回の大型研究計画のタイムラインの紹介し、2018 年から次期の大型研究計画の準備することを説明した。2018 年 3 月末の大型研究計画ワークショップ実施について示した。当委員会のメンバーには 2017 年 12 月 28 日までに日程調整を行いたい。ワークショップの結果をフィードバックさせ、各々の大型研究計画をブラッシュアップさせたい。

以下の意見があった。

中島：ボトムアップ型になっているので、より大きな予算で継続的に予算を取れるように大きな視点をもたらしていただきたい。特に宇宙開発などには大型予算が必要である。

藤井：国プロではトップダウンのものを入れたいが、夢ロードマップには入れたい。

西：従来の大型研究と新規の大型研究との関係をどのように考えるのか？

評価された内容と申請者の意見に齟齬があるので、説明を求めたい。

田近：新規提案などについては 2018 年 3 月末のヒアリング後に再度、行う予定である。

川幡：資料を基に、一部の学協会長に誤解があったので、確認する。大型研究の審査・評価に JpGU は関与していない、研究計画評価は日本学術会議が行っているものと説明した。もちろん、JpGU では地球惑星科学委員会と協力して夢ロードマップ作成を支援することになっている。

2018 年 5 月の連合大会時のユニオンセッション U-8 において、各セクションから夢ロードマップを紹介していただき、これをもとにして議論、ブラッシュアップする予定である。夢ロードマップに記載すべき項目は、学問分野の将来像、短期的には具体的な計画で、1000 字程度の説明文を JpGU 参加の学協会に作成を依頼した。併せて、学協会などに、関連事項でのポスターセッションをお願いしている。サイエンスプレジデントに学協会から大型研究計画の情報を集約し、各々のセクションで議論し、推敲し、夢ロードマップを完成させる予定である。今後、大型研究申請者（既往の）に対しての参加依頼をする予定である。

藤井：2018 年末には夢ロードマップを完成させたい。資料を基に当委員会がかかわっている大型研究計画、マスタープランとの関係を示した。2018 年 5 月はキックオフとなる予定である。

中村（正人）：既往の夢ロードマップの否定はしないことが必要。タイムラインと現実とのかかわりを考えるべきである。

6. 日本の長期的研究力衰退への地球惑星科学委員会と JpGU の連携と対策

研究力衰退の問題を対処するために、今後、当委員会と JpGU の連携が必要であることを確認した。

以下は意見である。

木村：研究と教育のレベルの低下を考え、当委員会と JpGU と協力をして教育・研究力向上にむかって 取り組みたい。

川幡：日本学術会議の提言は網羅的であるが、JpGU は学会に関わる分野を中心に、より具体的事項を扱いたい。当委員会では隣接分野との協議、審議を行っていただきたい。

西山：既往の提言で示されている。地球惑星科学委員会で扱う内容ななにか？

木村：自らの改革を行う。国立大学では IT 利用の教育を連携してはどうか？

教育と研究の連携が必要、face to face の必要な教育分野と IT 利用が可能な教育分野を視野に入れた将来設計を行い、提言を作成していくことが望まれる。

安成：地球惑星科学は世間では評価されている。伊方原発については広島高裁が阿蘇火砕流を考慮した原発の差し止めを行っている。地球惑星科学で得ているサイエンスの結果を将来的な計画論に必要であることを社会が認めてきている。社会からの要求があるにも関わらず、地球惑星科学の研究者から、社会が分かりやすいと考えるような発信が遅れているのではないのか？社会と地球惑星科学が連携していくことが必要。

7. 今後のスケジュールについて

4月総会時に地球惑星科学委員会を設定する予定。

コメント、植松：海洋研究所や極地研究所は日本学術会議の提言によって設置された。

文科省などを対象とすること以外に、省庁を超えた地球惑星科学がより大きな研究課題を持ち、より大きな視点、視野での研究対象や研究基盤組織を作る提案を出していくべきではないのか？

8. その他

川幡：資料を基に、JpGU の現在の活動状況と動向について説明を行った。若手研究者が全会員の 1/3 を占め、AGU との共同開催で外国人の参加が千人を超え、連合大会での参加者も増えた。将来にむかい AGU とはさらに連携を深める予定である。PEPS にインパクトファクター（クラリベイト・アナリティクス（旧トムソン・ロイター）社）

が2018年夏に付与される予定であることが報告された。選挙についての紹介を行った。学協会長会議に対し夢ロードマップ作成依頼し、三宅賞（地球惑星科学において物質科学の研究で優れた研究者を対象とする）を2018年以降隔年に授与する予定で作業が進んでいることが報告された。